



中国軍事力の脅威

2017年7月

軍事・情報戦略研究所長 西村金一

説明は、全てパワーポイントを使用して行います

導入

中国は1994年前後、鄧小平の改革開放の政策により、外国から多額の投資を受け入れた。中国に進出した企業には、中国で生産する製品のほとんどを外国に輸出すること（国内での消費は国民の生活水準からは到底無理だった）、そしてその製品には「メイド・イン・チャイナ」の表示を義務づけた。米国のナイキの会社が中国で製造すれば、それもメイド・イン・チャイナの表示が付く、ユニクロがフリースを中国で製造すれば、メイドインジャパンではなく、メイド・イン・チャイナのタグが付けられる。この時期から中国には、法人税、関税、従業員への報酬などのお金が溢れるように入り、中国経済は飛躍的に向上した。大金の流入とともに、軍事力の近代化も始まり、そして著しい増強がみられた。

2013年には、空母「遼寧」を就航させ、艦載機の離発着訓練を行い、母港の北海艦隊司令部がある青島から南シナ海に面する南海艦隊基地の三亚に展開した。だが一方では、私が、数年前に北朝鮮国境に近い延吉空港に降り立った時には、滑走路に十数機の旧世代戦闘機 Mig-21 が整然と並べられ、延吉滞在中にはその Mig-21 が飛行するのをよく見かけた。

このように、中国軍は、近代的な兵器を周辺諸国に見せつける一方で、中国辺境の地では、旧式軍用機が国防の任に当たっている。

実際のところ、中国軍は一体どれほど近代化しているのか、どれほど旧式の兵器を保有しているのか、そして近代化している戦闘能力はどのようなものなのかを分析してみたい。

なお、中国共産党は、自国の軍隊を「人民解放軍」と呼称している。かつては実名通りであったかもしれないが、現在は他国の領土・領海まで占領して居座り、今後もその活動範囲を拡大する動きをしている。また、本来ウイグル族やチベット族の土地を占領して、その民族の独立運動を弾圧し、根こそぎ抜き取ろうとしている。とても人民を解放するための軍隊と表現することは不適當である。よって、ここでは「中国軍」という表記にする。

ここでは、中国の軍事予算、航空戦力、海上戦力および陸上戦力について、この20年間の変化を分析して明らかにする。

1. 中国軍の特色

(1) 中国軍の特色

20年以上も前は、ポンコツ兵器ばかりで、日米情報関係者に笑われていた。
怖いところは、近代化を進め20年以上も経つと、近代兵器を保有して自信をつけた。

(2) 中国は、周辺国の軍事的脅威に囲まれている。

そのため、周辺国への対応に、約1/2の戦力を国境に張り付けなければならない。

国内の多民族への対応も必要

(3) 中・露・印・日4カ国兵力比較

- ・地上軍兵員の比較：中国が圧倒的に優越、日本の10倍
- ・空軍作戦機数の比較：中国が優越、日本の5倍
- ・海軍艦艇数の比較：中国が優越、日本の2.5倍

2. 中国空軍力はどうなのか

用語の説明

(1) 質・量の変化

作戦範囲の拡大。中国の沿岸部から日本列島、南西諸島、台湾、南シナ海に拡大

(2) 空軍作戦機（旧型・新型）数の変化

(3) 爆撃機の行動半径はどこまで。グアム基地まで

3. 中国海軍力はどうなのか

用語の説明

(1) 駆逐艦とは、その数の推移

2011年頃、新旧の数量がそれぞれ約50%

2030年頃には、全て新型に

2050年頃には、新型が1994年頃の数量の2倍に

(2) フリゲート艦とは、その数の変化

駆逐艦と同じ

(3) 中国潜水艦の特色

駆逐艦と同じ

4. 中国地上軍の実力はどうなのか

軍の配備の特色

7個軍区から5個戦区への改編、統合作戦指揮組織へ

戦車と火砲の近代化

中国軍の上陸能力の向上

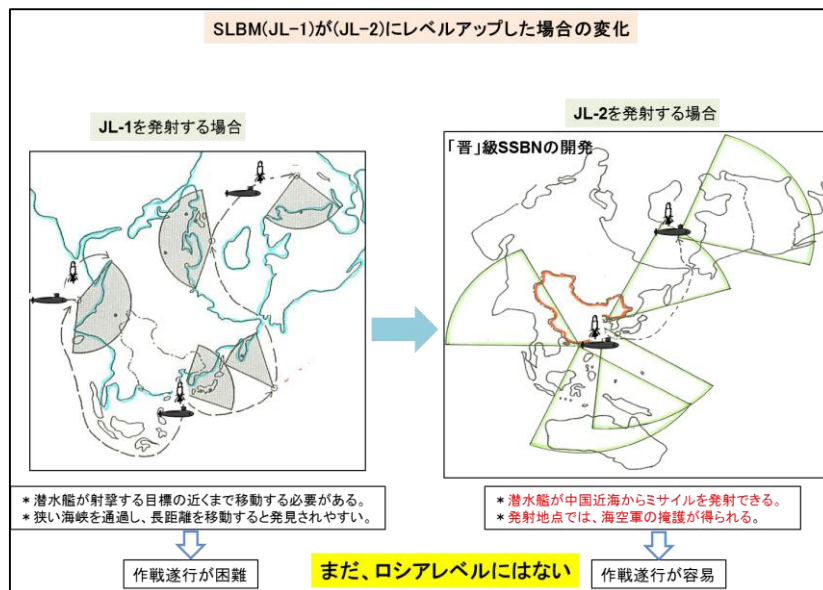
5. 各種攻撃要領（戦闘）のイメージ

- (1) 航空戦闘の変化
- (2) 海上（中）戦闘の変化
- (3) 自衛隊の上陸作戦の要領（イメージ）
- (4) 米空母打撃群の構成

6. 中国の弾道ミサイルは

- (1) 中国弾道ミサイルの種類と射程
- (2) 台湾正面に向けられている弾道ミサイルは何か
- (3) 日本に向けられている弾道ミサイルは何か
- (4) インド・ロシア正面に向けられる弾道ミサイルは何か
- (5) 米国に向けられる弾道ミサイルは何か
- (6) 潜水艦発射弾道ミサイルは
- (7) 中国弾道ミサイル（旧型・新型）の変化

パワーポイント例



参照文献：『自衛隊は尖閣紛争をどう戦うか』（祥伝社新書）